

# 学位論文審査の要旨

学位申請者	Baraniak-Hirata Zuzanna Maria ジェンダー学際研究専攻2016年度生	論文題目	Exploring the Takarazuka world: An ethnographic study of Takarazuka Revue's marketing strategies, urban space, and fan culture development
審査委員	主査:	棚橋 訓 教授	インターネット公表
	副査:	大橋 史恵 准教授	
	副査:	申 琪榮 教授	
	審査委員:	倉光 ミナ子 准教授	
	審査委員:	マイルズ・キャロル 助教	
学位名称	博士 社会科学		
(英語名)	(Ph. D. in Anthropology and Gender Studies)		
			学位論文の全文公表の可否 : 否
			「否」の場合の理由
			<input type="checkbox"/> ア. 当該論文に立体形状による表現を含む
			<input type="checkbox"/> イ. 著作権や個人情報に係る制約がある
			<input checked="" type="checkbox"/> ウ. 出版刊行されている、もしくは予定されている
			<input checked="" type="checkbox"/> エ. 学術ジャーナルへ掲載されている、もしくは予定されている
			<input type="checkbox"/> オ. 特許の申請がある、もしくは予定されている
			※本学学位規則に基づく学位論文全文のインターネット公表について

## 学位論文審査・内容の要旨

本論文は、宝塚歌劇団の本拠地でありそのファン文化の〈聖地〉である兵庫県宝塚市にある宝塚大劇場に焦点を当て、宝塚ファン文化をその中核である宝塚大劇場周辺の〈タカラヅカ世界〉において捉え、それがどのように認識され、創造され、具体的に地域空間として編成され、いかに独自の超高関与型の消費文化が形成されているのかを明らかにすることを目的としている。また、本論文のデータは、長期住み込み型のフィールドワークでの参与観察を中心に、面接調査、Qual-GIS (Qualitative Geographic Information System) を用いたファンの認知地図調査、ライフストーリー調査を援用した複合的研究手法で収集されている。

本論文では、まず宝塚歌劇団の創設者・小林一三と彼の経済人としての経営思想、宝塚歌劇団と少女文化の創造過程を概観し、女性ファンを中心に成り立つ宝塚歌劇団のファン文化と宝塚歌劇団の経営戦略の系譜を析出して、〈タカラヅカ世界〉の基盤を描き出す。そして、宝塚ファンの高密度・高関与型の消費行動が醸成された過程では、男役のパフォーマンスの前景化と歌劇団の人材育成制度の確立が不可欠であることを確認した。次に、フィールドワークの参与観察調査と面接調査の結果に基づいて、宝塚ファン文化の〈聖地〉となる宝塚市中央部・宝塚大劇場周辺の空間形成過程と宝塚ファンの観劇・消費習慣を分析し、現在の〈タカラヅカ世界〉の実相を記述し考察する。宝塚ファン文化の〈聖地〉、すなわち、宝塚大劇場をその中核とした公的/私的な宝塚市の都市空間は、観劇行動を超えたかたちで宝塚ファンが交差する場であるだけでなく、宝塚のトップスターが実際に「生活」する空間でもあって、ファンには「タカラヅカを生きる」ことの追体験を提供する場でもあることを明らかにした。最後に、宝塚ファンの〈タカラヅカ世界〉の認知地図とライフストーリー調査に基づいて、〈タカラヅカの空間〉(宝塚市中心部の都市景観)が宝塚ファンにいかに認識され、いかなる意味を生成しているのかを析出し、その空間の中を移動し、その空間を消費し、さらにその空間で消費するファンたちの〈タカラヅカ世界〉の体験の実相について考察する。そして、宝塚大劇場周辺の空間が宝塚ファン文化において多元的な機能を果たしており、それはファンコミュニティによる意識的かつ継続的な場づくりへの主体的参画と協働によっても生み出されていると結論づけた。こうした拠点劇場とその周辺の地理的な都市空間は、宝塚歌劇団特有の経営戦略および宝塚ファンの個人的な消費活動により実際に創造され構築された現実であるとともに、その現実を超越して、個々の宝塚ファンの日常的かつ宗教的巡礼さながらの儀式的な遊歩(身体的移動)を通して追体験され、複合的で多元的なくタカラヅカ世界〉として構築されていることが指摘された。

本論文を通じて、公的な都市空間が地域のファンコミュニティの協働に基づく共有を通じて生み出される想像とファンタジーの場所として存在し、継続的に再構築される続ける場所であることが明らかにされたが、本論文ではこうした一連の分析の過程を「ファン文化地理学」と称する。本論文で提唱されたファン文化地理学の視座は、個々のファン(消費者)の認識に基づいて意義づけられた地域コミュニティを軸に都市空間の特質を析出し、現代のファン文化の形成過程とともに地理的空間に展開する身体を経験と消費文化が節合する過程をも分析に取り込むことで、地域という場が作り出される過程の背後にある実践的戦略と戦略に関する洞察を与えてくれる。さらに、本論文で援用された複合的研究手法は、今後、ファン文化、消費文化、都市文化などの幅広い研究分野への応用が期待できる。

本論文は詳細なフィールド・データの分析、さらに多様な資料を駆使した総合的手法による優れた実証研究として高く評価され、旧来の宝塚歌劇団の研究が舞台上のパフォーマンスの表象論的な分析に偏向していたことに明確に一線を画して、独自性と新規性に溢れた研究となっている。空間・場所などの地理的概念の一層の精緻化の必要と、宝塚市を超えて東京などを含めた広域での〈タカラヅカ世界〉について議論すべき余地を残していることが指摘されるものの、それは本論文の意義と価値を全く損なうものではない。

2022年12月12日と2023年2月8日に審査委員会を開催し、基本概念の精緻化、認知地図の処理方法の精緻化、ジェンダー視点での分析の強化、等々について論議がなされたが、その結果を受けて適切な修正が施された。2023年3月1日に公开发表会(online開催)と最終試験を実施したが、公开发表会及び最終試験での質疑応答の内容を含め、最終審査会では、委員全員が一致して本論文が学位取得に相応しい水準に達しているものと判定した。よって、本委員会では申請者に対してお茶の水女子大学博士(社会科学)、Ph. D. in Anthropology and Gender Studiesの学位授与を適当と判断した。